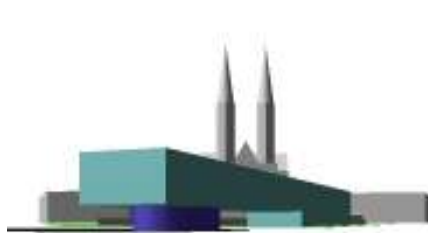


ウィーン・ショットtentア計画

多田 将宏

Tada Masahiro

1991 年 21 期卒業



表題の通り、ウィーンでの建築設計案である。先ずその経緯からお話すると、私は大学を卒業後建設会社に 7 年勤めた後、2 年間ウィーン応用美術大学のハンス・ホライン研究室で学んだ。これはその時の 2 年目冬学期の設計課題である。

ホラインについてであるが、一言で表現すると良くも悪くも「ひどい人」であった。彼も類に漏れず多忙な建築家で実際には月に 1〜2 回しか現れないのだが、ちょっと登場の仕方が特殊であった。彼が来る事は研究室の掲示板で当日の朝いきなり知らされる。それからが大変で、みんな自分の場所を確保し、壁に図面を貼り机の上に模型を展示してプレゼンテーションの準備をする。その日 1 日は戦争のようである。ホラインが来るのはいつも夜である。しかし予告の 6 時を過ぎても一向に現れない。皆、当然のようにして待っている。9 時になってようやくひょっこり現れ、一人ずつ順番に講評が行われる。最後の人が終わるのはすっかり真夜中である、というような調子である。だから学生は学校には毎日来ていなくてはならないし、日々準備もしておかなくてはならない。

さてプロジェクトについてであるが、ウィーン中心部では建築できる場所は少ない。ある意味もう無いのかもしれない。そんな中で今回、ショットtentア駅という路面電車の終点ロータリーとヴォテーフ教会との間の広場を敷地を選んだ。テーマは「公共建築」で条件設定は各自に任される。私の場合は機能は市民のためのメディアコミュニケーションセンターであるが、この交通の発達によって取り残された陸の孤島を駅施設と建築的に繋げる橋のような建築を提案した。ウィーンではこのような場所が他にもあるが、いずれも人通りも少なく治安も悪い。そこでアクセスの利便性を上げ、公園も整備し活性化する提案をしたつもりであった。

しかしこの繋ぐという概念がなかなか受け入れられないのだ。今回の留学で一番感じた事は西洋と東洋の両極性であったが、ウィーンのような街ではまず規範としての街並みがあり、良くも悪くもそれを変えようとした時に猛烈な批判の対象になる。それでその後、この場所にまつわる歴史的事実や都市計画を徹底的に調べ上げ再度議論に望んだが、残念ながら最後まで理解は得られなかった。だがこの過程における議論こそが、貴重な体験であったと思う。

(※詳細については<http://www.geocities.jp/masakunst/>)

